

主人公の吾一は、武士上がりの父と病弱な母を持ち、中学入学に向けて向学心に燃えている少年です。家計は、不平土族の父が仕事にも就かず、先祖代々の土地の裁判沙汰に明け暮れているため火の車。とても中学進学どころではありません。吾一は奉公に出、わずかな給金を学資にと貯めていましたが、父はそれも裁判に使い込んでしまつ。その上、借金返済のために内職をしていた母が過労で亡くなつても、葬儀に出ない伝法ぶり。

吾一は、このままでは一生小僧で終わると、家財を売り、義理を果たした後、父を捜すために東京に出ます。身寄りのない東京では、食べるにも困り、下宿屋で働きますが、あろう事か、ここでも父の素業で小僧扱いにされます。そんな吾一の身を哀れんで、引き取ってくれたおばあさんは、おともらい屋（葬儀にでて菓子をもろう）の手伝い。吾一は、堕ちてゆく自分の生活に希望を失います。

印刷工の見習いの口を見つけて、おともらい屋の生活から抜け出た吾一。偶然にも小説を校正していた小学校の恩師に会い、どんなことがあつても勉学をあきらめない決心をします。吾一を巡る環境は辛いものですが、作者が言わんとしたことは、「患難汝を玉にす」だと思えます。舞台の社会状況は違いますが、苦難に負けず生きる吾一の姿を、年少の方に勧めたい本です。

F・M・

金の星社

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞